

落ちてきたお星さま

徳之島町立亀津小学校 五年 山下 倖朋

ある暑い夏の日の夜、金見の砂浜に、お星さまが静かに落ちてきました。

暗い砂浜に、光り輝くお星さまが落ちてきたのですから、金見に住む動物たちはびっくり、次々に、お星さまの周りに集まってきました。

「どうしたの。」

「何かあったの。」

動物たちが聞いてみても、

「空に帰りたい。」

と、小さな声で答えて、ただ静かに泣いているだけでした。

そこで、ヤドカリさんが、

「ぼくにまかせてよ。ぼくが、空に帰してあげるよ。」

と、お星さまを空へ帰そうとしました。でも、いくらヤドカリさんが、お星さまを押してみても、砂浜に二人のあとがスーッと二本できるだけで、お星さまを空に帰すことができません。ヤドカリさんは、

「ごめんね。」

と、小さな声で言いました。

次に、アマミノクロウサギさんが、

「ぼくにまかせてよ。ぼくが、得意なジャンプで空に帰してあげるよ。」

と、お星さまを抱っこして、空に向かってジャンプしました。でも、何度ジャンプしてみても、ウケユリの花が少し揺れるだけで、お星さまを空に帰すことができません。アマミノクロウサギさんは、

「ごめんね。」

と、小さな声で言いました。

その次に、キノボリトカゲさんが、

「ぼくにまかせてよ。ぼくが、得意な木登りで空に帰してあげるよ。」

と、お星さまをおんぶして、森で一番高いガジュマルの木に登りました。でも、一番上の枝先からいくら背伸びをしてみても、お星さまを空に帰すことができません。キノボリトカゲさんは、

「ごめんね。」

と、小さな声で言いました。

それを見ていたアサギマダラさんが、

「わたしたちにまかせてよ。わたしたちが高く飛んで、空に帰してあげましょう。」

と、何十、何百匹の仲間たちと、お星さまを抱えて、空に向かって飛び上がりました。ウケユリの花よりも、

森で一番高いガジュマルよりも高く、金見の砂浜がとて
も小さく見えるくらい、ずっと高く飛び上がりました。
それでも、お星さまを空に帰すことができません。アサ
ギマダラさんは、

「ごめんなさい。」

と、小さな声で言いました。

動物たちは、他にいい方法がないか考えましたが、な
かなか思いつきません。しばらくして、ウミガメさんが、
「お星さまを、空に帰す方法じゃないんだけど……。」
と、ゆつくりと話を始めました。

ウミガメさんの話を聞いた動物たちは、

「うん、いい考えだ。やってみよう。」

動物たちは、金見の砂浜にうち上げられている夜光貝の
かけらを、集められるだけ集めました。そして、ヤドカ
リさんもアマミノクロウサギさんも、キノボリトカゲさ
んも、アサギマダラさんも、ウミガメさんも……、みん
なで、そのかけらをみぎました。朝が来ても、昼が来
ても、一生けん命みがき続けました。

次の夜、まだ空に帰れず泣いているお星さまに、ウミ
ガメさんは言いました。

「もうすぐ月が出てくるけど、そうしたら、周りを見て
ごらん。」

暗い空に月が出て、夜空が明るくなると、不思議なこと

がおこりました。なんと、砂浜がキラキラと光りだした
のです。

「うわあ、きれい。」

お星さまは、思わず言いました。そして、キラキラ光る
物を、よく見てみました。

「これは、夜光貝のかけらだよ。よくみがくと、七色に
光るんだよ。まるで、星空みたいでしょ。」

ウミガメさんが答えました。泣いて悲しそうにしている
お星さまを元気づけるために、みんなで夜光貝をみがい
たのです。それを知ったお星さまは、にっこり笑いまし
た。すると、お星さまがスーッと浮かび上がりました。

「わたしは、仲間の星とはぐれてしまい、悲しんでいる
と、この砂浜に落ちてしまったのです。でも、この星
空のような夜光貝を見て、心が温かく軽くなりました。
これで空に帰れそうです。みなさん、本当にありがと
うございました。」

そう言うと、お星さまは、夜空に消えていきました。

動物たちが空を見上げると、いつの間にかきれいな星
空が広がっていました。